

佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書第20集

芝宮遺跡群

MINAMI KAMINAKAHARA

MINAMISHIMONAKAHARA

南上中原・南下中原

長土呂遺跡群

KAMI

HIJIRI

BATA

上

聖

端

長野県佐久市長土呂 南上中原・南下中原遺跡
上 聖 端 遺 跡 発掘調査概報

1989

佐久市教育委員会
佐久埋蔵文化財調査センター

例　　言

1 本書は、佐久市土木課が行う昭和63年度市道1-1号線道路改良工事事業に伴う、埋蔵文化財発掘調査の調査概報である。

2 調査委託者 佐久市土木課

3 調査受託者 佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター

4 発掘調査所在地籍及び面積

芝宮遺跡群 南上中原・南下中原遺跡 (N S M) 7,000m²

佐久市大字長土呂 752-1、755、757-1、759-1・2他

大字小田井 1-1・2

長土呂遺跡群 上聖端遺跡 (N N K) 5,000m²

佐久市大字長土呂 113-2、125、127、128、140-1・2他

5 調査期間 南上中原・南下中原遺跡 昭和63年5月11日～9月9日

上聖端遺跡 昭和63年5月11日～10月10日

6 調査団の構成

事務局 佐久埋蔵文化財調査センター

所長 西沢 正巳

庶務係長 畠山 俊彦

庶務係 田中 芳美 (昭和63年12月退任)

菊池 直美 (平成元年2月就任)

調査係主任 高村 博文

調査係 三石 宗一、木内 品義、須藤 隆司、小山 岳夫、小林 真寿、翠川 泰弘、竹原 学、助川 朋広、篠原 浩江 (嘱託)

調査団 南上中原・南下中原遺跡

团长 黒岩 忠男 (佐久考古学会副会長)

調査指導者 白倉 盛男 (佐久考古学会副会長)

林 幸彦、羽毛田卓也 (佐久市教育委員会)

調査担当者 三石 宗一

調査補助者 木内 品義

調査員 佐藤 敏 (佐久考古学会員)

調査補助員 宮川百合子

発掘協力者 五十嵐勝吉、棚沢三之助、開口 正、開口与志子、角田 とく、

樋田咲江、花里きしの、森泉欽一、森泉源治郎、森泉好治、
森泉富美子、柳沢千波、柳沢典子、
(大学生) 有沢保晴、関由美子、田島和美、三浦洋崇、道上卓美

上聖端遺跡

| | |
|-------|---|
| 団長 | 黒岩 忠男 |
| 調査指導者 | 白倉 盛男、林 幸彦、羽毛田卓也 |
| 調査担当者 | 高村 博文 |
| 調査主任 | 須藤 隆司 |
| 調査副主任 | 三石 宗一、助川 朋広 |
| 調査補助者 | 木内 品義 |
| 調査補助員 | 小林 幸子、宮川百合子 |
| 発掘協力者 | 五十嵐勝吉、井出愛子、井出つねじ、上原あや子、大井キセ、 小田川栄、小田川時江、樹沢三之助、C.クリストファー、小山林一、 岡口 正、田中智恵子、角田 時、角田とく、角田良夫、花里きしの、 樋田咲江、村松とみ子、茂木とよ子、森泉欽一、森泉源治郎、 森泉好治、柳沢千波、柳沢典子、渡辺まさじ (大学生・専門学校生) 有沢保晴、香山優子、公文良成、神津岳泉、 里見英司、塙川伸幸、関由美子、田島和美、別府俊克、堀籠英和、 三石勢治、三浦洋崇、道上卓美、谷津和彦、柳沢利明、柳橋章示、 依田直樹 (高校生) 庄野達也、畠浩治、花里正樹、古館寛亮、中澤直樹、 荒木正博、 |

目 次

例 言

| | |
|-------------------------------|----|
| 第Ⅰ章 発掘調査の経緯..... | 1 |
| 第1節 発掘調査に至る動機..... | 1 |
| 第2節 調査日誌..... | 2 |
| 第Ⅱ章 佐久市長土呂付近の自然環境（地形と地質）..... | 3 |
| 第Ⅲ章 基本層序..... | 6 |
| 第Ⅳ章 南上中原・南下中原遺跡の調査の成果..... | 9 |
| 第Ⅴ章 上聖端遺跡の調査の成果..... | 13 |

第Ⅰ章 発掘調査の経緯

第1節 発掘調査に至る動機

南上中原・南下中原遺跡の存在する芝宮遺跡群は、佐久市大字長土呂・小田井地籍に所在し、浅間山に源を発する濁川の浸蝕による田切り地形の北側、標高720～760mを測る段丘上に位置する。上聖端遺跡は、その対岸に展開する長土呂遺跡群の中央付近に位置し、標高は735m前後を測る。北方には昭和54・55・57年度に発掘調査の行われた芝宮遺跡があり、西方には昭和62年に発掘調査の実施された下芝宮遺跡・下聖端遺跡が存在する。

今回、佐久市土木課が実施する市道1-1号線道路改良工事に伴い、昭和63年4月25日、現地にて佐久市土木課・佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センターの三者で協議を行った。その結果、遺跡の破壊が余儀なくされる事態となり、緊急に記録保存する必要性が生じた。そこで、佐久市教育委員会が佐久市土木課より委託を受け、佐久市教育委員会からの委託を受けた佐久埋蔵文化財調査センターが発掘調査を実施する運びとなった。



第1図 南上中原・南下中原遺跡、上聖端遺跡の位置(1:50,000国土地理院地形図による)

第2節 調査日誌

南上中原・南下中原遺跡

5月11日（水） テント設営・機材の搬入を行なう。

5月16日（月）～18日（水）

調査区東端の低地内に $2 \times 2\text{ m}$ のテストピットを4箇所設定し、掘り下げ・実測・土壤サンプルの抽出を行なう。

5月17日（火）～21日（土）

調査区の西側を第1地区、東側を第2地区とし、重機により第1地区の表土削平を始め併行してプラン確認作業を行なう。

5月24日（火）～7月8日（金）

第1地区的造構の掘り下げ・実測作業・写真撮影を行なう。

7月11日（月）～18日（月）

第2地区的表土削平作業を重機により行ない、併行してプラン確認作業、第1地区的実測作業・写真撮影を行なう。

7月19日（火）～8月20日（土）

第1地区実測作業、第2地区造構掘り下げ・実測・写真撮影等を行なう。

9月5日（月）・7日（水）

航空写真及び測量の準備として、調査区全体の清掃を行なう。（金井城跡調査協力者23名・上聖端遺跡調査協力者5名の協力を頂く。）

9月9日（金） 航空写真撮影を行ない、発掘調査を終了する。

上聖端遺跡

5月11日（水）

機材の搬入・整備、テント設営を行う。

5月16日（月）～19日（木）

現水田面下の古代水田の確認を目的とし、遺跡南側の低地部の調査を行う。6箇所のテストピット（ $2 \times 2\text{ m}$ ）で確認した結果、現水田面下に2・3枚の鉄分集積層を確認することが出来た。但し、伴出遺物等の検討から、それらは近現代における水田面の重なりと判断された。また、その分布を追うことによって、「田切り」中央部から開墾を始め、徐々に広げて現水田面のひろがりに至っていることが把握された。

5月20日（金）～30日（月）

遺跡の主体である台地上の基本層位を確認する。調査区北半の第Ⅰ層（耕作土）を重機にて除去し、造構確認調査を行う。

5月31日（火）～7月26日（火）

溝状造構及び古墳時代後期を主体とする住居址群の調査を行う。

7月27日（水）～8月3日（水）

調査区南半の耕作土を重機にて除去し、造構確認調査を行う。

8月4日（木）～10月1日（土）

掘立柱建物址・土坑・溝状造構及び奈良・平安時代を主体とする住居址群の調査を行う。

10月3日（月）・4日（火）

航空写真及び測量の準備として、調査区全体の清掃を行う（金井城跡調査協力者31名の協力を頂く）。

10月10日（月） 航空写真撮影を行い、発掘調査を終了する。

第Ⅱ章 佐久市長土呂付近の自然環境（地形と地質）

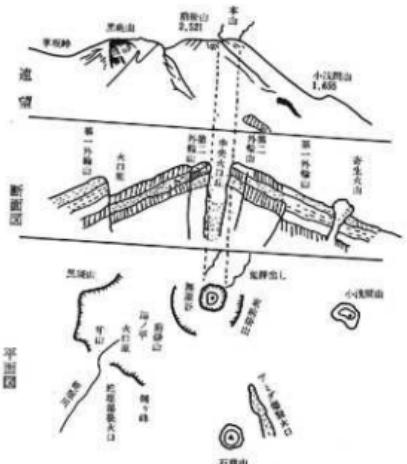
この遺跡は佐久市の最西北端の芝宮遺跡群と小諸市との境に位置している。この付近一帯は北方にそびえている浅間火山の噴出物によって地質構成されている地帯で、この地域環境を記載するには先づ浅間山の構成からはじめなければならない。

浅間山は群馬長野県境の上信越高原国立公園の最南端にある火山で日本の中においても珍しい代表的な活火山で現在も盛んに噴煙を上げていることで知られている。それに加えて研究史の長いこと、火山活動の記録が古くから残されていること、火山形態が各面から具備したことなどにもよりわが国東西交通の要路中仙道・信越線沿いにあり、活動している火山として時に大噴火をして周辺に災害を及ぼすこともあり、四季の風景の変化のすばらしさなどによって古来文学絵画の対象ともなり多くの作品も残されている。

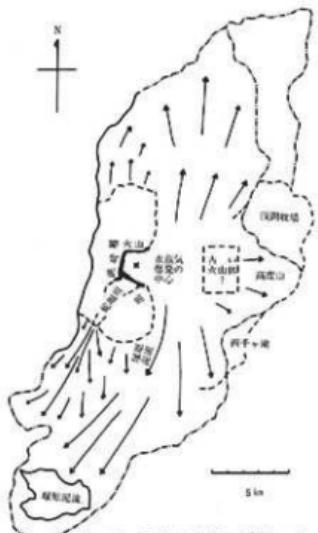
浅間山は黒斑山・前掛山・中央釜山の三重式成層火山で標高2560m、四方からの眺望の変化があり、しかも常に噴煙を上げ続けているので人目につき易いが、特に南方佐久市側から見渡す形態が実にすばらしい。

火山構造も含めて図示したものが第2図であるがコニーデ型の裾野と三重式噴火口寄生火山火口瀬など火山の模形を見るようである。しかも噴煙は上空の偏西風によって東に傾くことが多いため大噴火による災害も南側には及ばないのが現状である。

しかし長い火山活動の歴史をたどって見ると南方佐久市側にも噴火の状況を語る噴出物溶岩火



第2図 浅間山の形態と構造(白倉原図)



第3図 黒斑山東部の破壊によって生じた塚原泥流の流下した状態を示す図(荒牧重雄著「浅間山の地質」による)

山灰火山砂礫の堆積層が多く残されている。浅間山は我が国の火山としては最も新しい若い火山で第1次黒斑火山の活動を開始したのが新生代第四紀洪積末期であるが黒斑火山最盛期には単式成層火山で標高2800mを超える大型火山であった。その整然とした大火山は噴火口の東半分以上を破壊する大爆発によってその山体を失ってしまった。

その時の噴出溶岩熱水泥流の大部分が主として南方に流下して佐久市中佐都付近まで押出している。その堆積物は現在JR中佐都駅附近を中心として塚原・赤岩・平塚部落附近の田園地に散在し、松島湾に浮ぶ松島のように並んでいる泥流残丘である。基盤整備以前はその数100を越す大小残丘が浅間山頂方向から放射状に並んでおり地名の起源にもなっている。岩質の研究結果から黒斑岩壁に残っている岩石と同一であることが実証されている。

その破壊された黒斑火山の中心から再び活発な火山活動が再開されたのが前掛山に成長するわけであるが、その過程の長い期間における多量な噴出物である軽石流火碎流(熱火山灰砂軽石溶岩流)と降下火山灰砂が少なくとも二回以上に亘って佐久市北半部浅間火山南麓に厚さ20~30m以上堆積した。

これは浅間山の南面追分原以南・佐久市中込原・西端は小諸市権現堂西まで広範囲に亘って約223km²に分布し、佐久平北半部の生活

地表面を形成して第一・第二軽石流と呼ばれている。(第一軽石流を月層、第二軽石流を日層と命名されている。)

この軽石流は南東面の湯川を埋め、一部に湖沼状態も作り湿地水堆積層も各地に作り、浅間火山南麓面の凸凹地形面を平坦化した。

この大規模な第一軽石流日と小規模な第二軽石流月は南方中込原で尖滅している。日と月の間隔があった事を物語る20cm内外の黒土層が各所の田切り断面で確認されている。この軽石流日・月の地表面は火山灰砂軽石の堆積層で火山から噴出したままのもので固結凝集が不充分であるために、水の浸

蝕には頗る弱く豪雨洪水には地形面に大きな変化を受ける。従ってこの地帯には火山山麓特有な地形“田切り”が多く見られる。浅間山麓標高1000m内外に分布する湧水(湧玉・濁り・白糸・千ヶ滝)火口瀬蛇掘川などの浸蝕作用がこれにあたるわけである。湯川の谷も田切りの最大なものを見ることが出来るが浅間山麓から佐久平にかけて田切りの深い谷はその数大小合わせて、50を超えている。田切りは山麓湧水地下水の流下路ともなっており、弥生時代以来この周辺の標高750m以下の稻田耕作をささえてきたとも考えられ、田切りの分布と遺跡分布・古い集落分布には深い関係が見られるようである。

南上中原・南下中原・上型端遺跡はこの田切り密集地帯の中心部にある。濁りの田切りの谷巾は約100m、北西方向小諸市境の大田切りは谷巾150mを越し谷底に御代田町からの湧玉用水が流れおり何れも谷底には古い水田が拓かれており下流300m附近からは肥沃な中佐都美田地域に続いている。長土呂部落の地名の起源もこの低湿地に基づくと言われている。

(白倉盛男)

(参考文献)

1. 白倉盛男 1971 浅間山と火山博物館 小諸市立火山博物館
2. 荒牧重雄 1968 浅間火山の地質 地学団体研究会

第1表 浅間火山を中心とした編年
(荒牧重雄著「浅間火山の地質」による。一部加除。)

| K-A : 年代 | ¹⁴ C年代 (YBP) | 文書記録 |
|--|----------------------------|--|
| (164±62) 433±70 | | 8月5日 |
| 1783 A.D. (天明3年) | 8月4日 5月~8日 | 荒牧忠信著述 櫛原山噴火 吾妻大噴火・巌山 A-隕下軽石 A'-隕下軽石 |
| 1281 A.D. (?) (弘安4年) | | B-隕下スコリア、軽石上部也合岩流 |
| 870±80 ^a 980±102 ^b 1,030±99 ^c | | →追分山噴火 →B-隕下スコリア・軽石下部 |
| 4,500±150 ^d | | C-隕下軽石 D-隕下軽石 古湯大噴火 E-隕下軽石 |
| | | 大山灰 |
| (19,450±250) 11,300±400 | | →第2軽石流…島 噴出物下軽石 土層 第1軽石流…先 |
| (小林、1964) [北関東ローム] [赤堀井軽石] [YP] | | 軽石流 |
| | | 仙翁浴宿流→小浅間円頂丘→白糸隕下軽石 |
| [水蒸気噴火] (BP) ? | | →南北下軽石→上 中 下 部 區 墓 山 |
| 1.1×10 ⁴ y | | 高事・難の壁、 三方ヶ峠火山 →奥山大山 |
| 3.05~3.14×10 ⁴ y | | →群 横 番 野 |
| (OZIMA et al. 1960) | | ? |

第Ⅲ章 基本層序

南上中原・南下中原遺跡、上聖端遺跡は、浅間第一軽石流の厚い堆積によって形成された、隣接する台地に立地する。したがって、両遺跡の更新世の層序は基本的に一致する。しかし、完新世の堆積のあり方では、耕作の深さ、微地形等によって多少の異なりを見せていく。それは、各遺跡内でも観察できる事柄である。

南上中原・南下中原遺跡では、耕作が直接浅間第一軽石流（第Ⅳ層）まで達している箇所が多く、調査区中央の旧河川が確認された範囲のみに第Ⅱ層が存在し、大半は耕作土下が第Ⅳ層であり、その間に僅かに両層の漸移層が存在するだけである。したがって、遺構検出面は、大半が第Ⅲ・Ⅳ層で、部分的に第Ⅱ層である。

上聖端遺跡では、完新世の堆積が薄い台地南端を除いて、耕作土と浅間第一軽石流の間に黒色土（第Ⅲ層）の堆積が見られる。さらに、台地中央部の深い谷部では、耕作土と黒色土の間に黒褐色土（第Ⅱ層）の堆積も見られた。遺構確認面は第Ⅱ～Ⅳ層であり、その差は、以上の堆積状態の異なりによる。

1) 南上中原・南下中原遺跡の基本層序

第Ⅰ層 暗褐色（10YR 3/3）土層 耕作土、砂質。

第Ⅱ層 黒色（10YR 2/1）土層 パミス・ローム粒子を僅かに含む、粘質。

第Ⅲ層 暗褐色（10YR 3/4）土層 漸移層。

第Ⅳ層 明黄褐色（10YR 7/6）ローム層 浅間第一軽石流。

2) 上聖端遺跡の基本層序

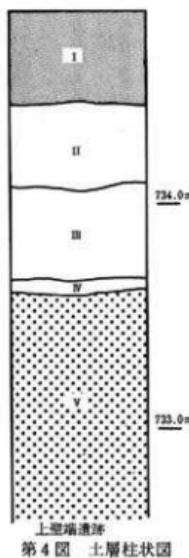
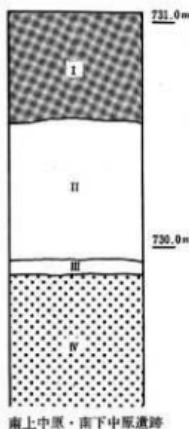
第Ⅰ層 暗褐色（10YR 3/3）土層 耕作土、砂質。

第Ⅱ層 黒褐色（10YR 3/2）土層 パミスを含む。

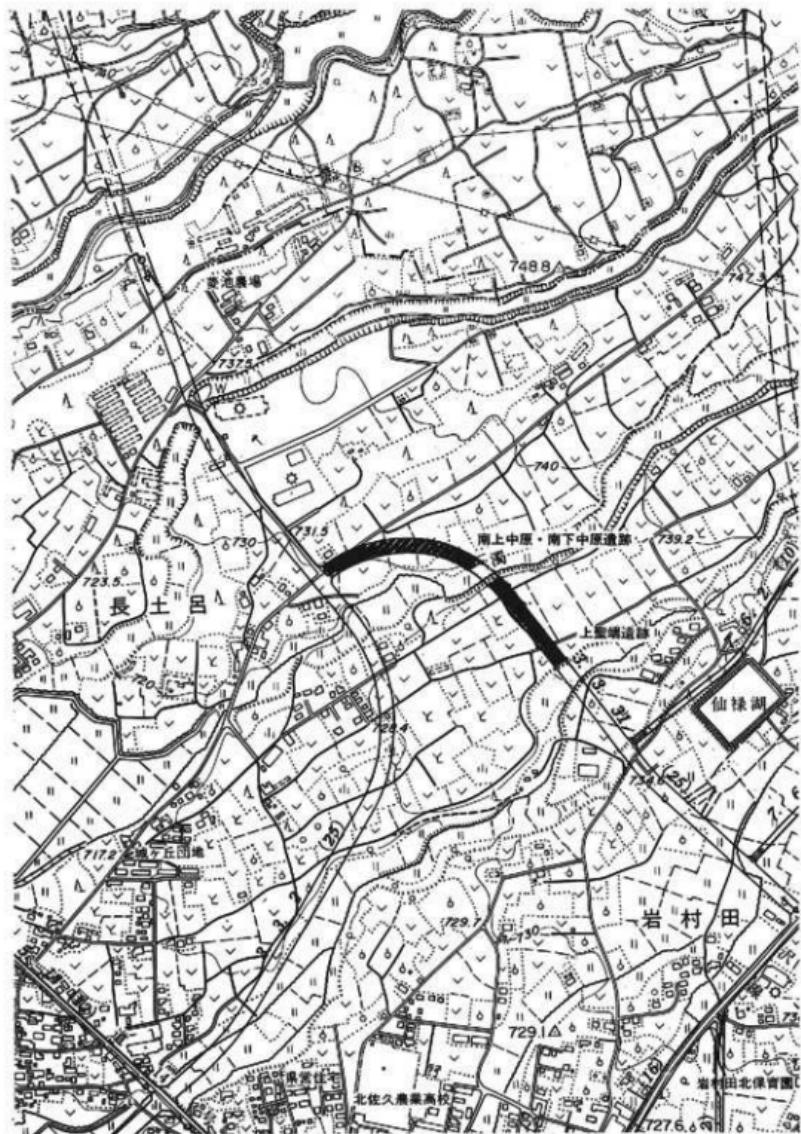
第Ⅲ層 黒色（10YR 2/1）土層 パミス・ローム粒子を僅かに含む、粘質。

第Ⅳ層 褐色（10YR 4/4）土層 漸移層。

第Ⅴ層 明黄褐色（10YR 7/6）ローム層 浅間第一軽石流。

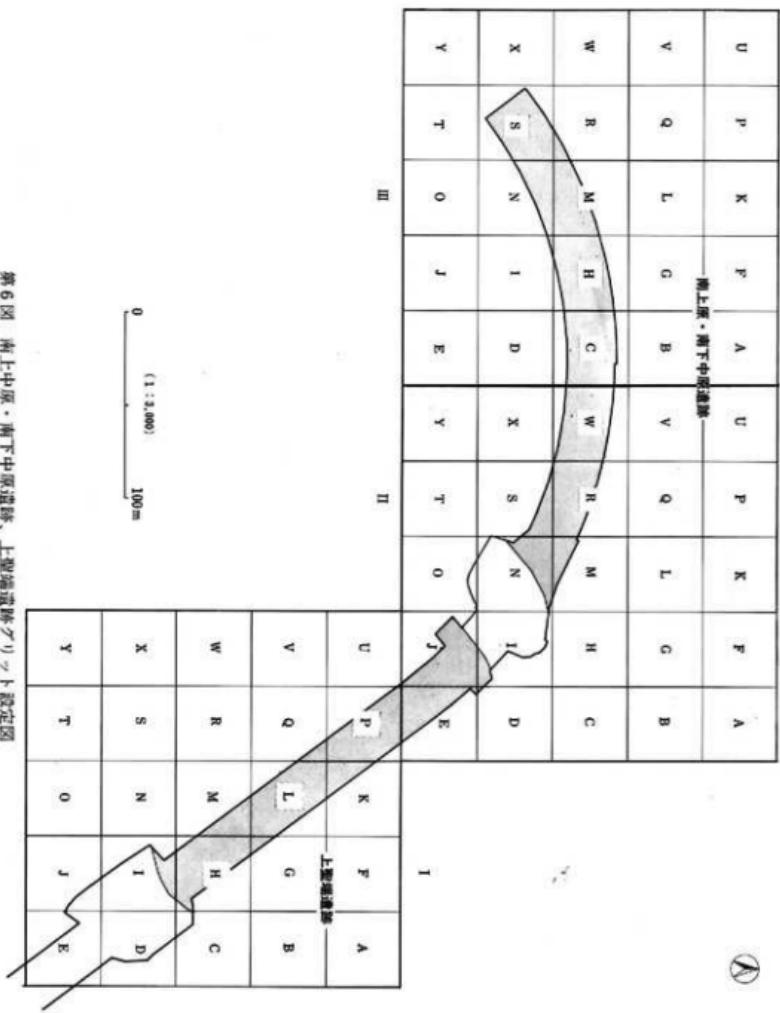


第4図 土層柱状図



第5図 南上中原・南下中原遺跡、上聖塙道路免掘区設定図
(1:10,000 佐久都市計画道路網図による。)

第6図 南上中原・南下中原遺跡、上野端遺跡アリット設定図



第Ⅳ章 南上中原・南下中原遺跡の調査の成果

芝宮遺跡群は、濁川の浸蝕による田切り地形の北側の標高720～760mの段丘上に存在している。今回調査の行われた南上中原・南下中原遺跡は、本遺跡群の南西端に位置し、標高は730m前後を測る。南側を流れる濁川との比高差は約10mを測り、さらに南側に存在する長土呂遺跡群とは約40～50mの距離を有する。

今回調査を実施した芝宮遺跡群南上中原・南下中原遺跡は、道路新設工事に伴なうものであり長さ約300m、幅約25mという範囲の調査であり、さらに北方及び東方に展開している大遺跡群である本遺跡群の全容を把握するには至らなかったが、現時点での成果を簡単にまとめてみたい。

本遺跡群内での発掘調査は、昭和54・55・57年度に芝宮遺跡（第一～三次）の調査が行われ、本遺跡の西方に接して、昭和62年度に下芝宮遺跡、昭和63年度に下芝宮遺跡Ⅱ・Ⅲの調査が佐久市教育委員会によって行われている。下芝宮遺跡からは古墳時代後期の住居址2棟・土坑一基、縄文時代の土坑1基等が検出された。また、下芝宮遺跡Ⅱ・Ⅲでは古墳時代後期2棟、平安時代2棟の住居址が検出されている。『佐久市遺跡詳細分布調査報告書』においても、本遺跡群は、縄文時代から平安時代の複合遺跡とされており、該期の遺構の存在が予想された。

本遺跡において検出された遺構は、古墳時代後期の住居址6棟、平安時代の住居址4棟、竪穴状遺構3基、掘立柱建物址4棟、その他土坑、溝状遺構、ピット群等である。

検出された住居址は、床面付近まで擾乱を受けたり、溝等によって破壊されているものが多く全容を把握できたものは極く僅かである。

古墳時代後期の住居址は、第1・2・6・8・9・10号住居址の6棟であるが、そのうち全プランを確認したのは第10号住居址のみである。長軸長434cm、短軸長390cmを測り、やや東西に長いもののほぼ隅丸方形を呈する。また、カマドは4棟より検出されており、いずれも北壁中央付近に位置する。出土遺物には土師器甕・环がある。甕は長胴甕が主体を占めるが、第9号住居址より胴部に把手の貼付された甕（8-2）が出土している。环には口辺部と底部の境に稜を有する所謂須恵器模倣环がある。また、第1号住居址からは多量の炭化材が出土しており、焼失住居と考えられる。

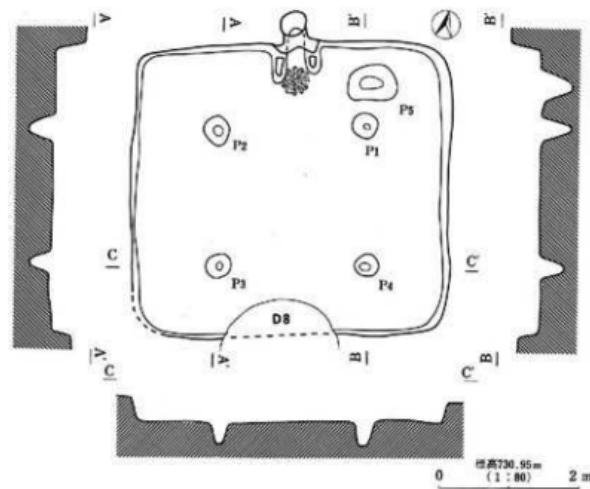
平安時代の住居址には、第3・4・5・7号住居址の4棟があり、おおむね平安時代前葉と中葉の二時期に大別される。第3・4・5号住居址からカマドが検出され、第3号住居址は北壁中央、第4・5号住居址は南東隅に位置する。前葉と考えられる第3号住居址の出土土器には土師器甕・环・皿があり、甕には口辺部が「コ」の字状に屈曲する肉薄の甕とロクロ調整による甕があ

る。この他、凸帯付四耳壺の胴部片が出土している。中葉と考えられる第4・5号住居址からは羽釜が出土している。

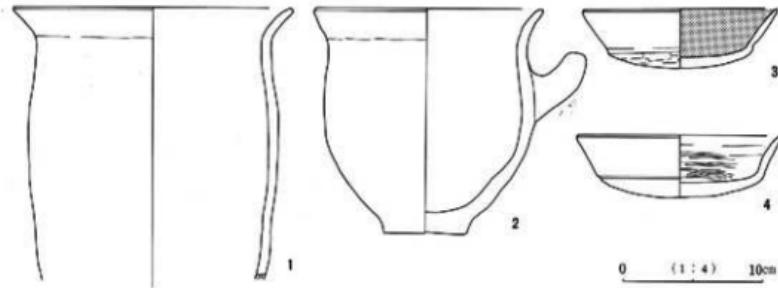
この他、現在の道路の前に使用されていた道路跡、自然流路と考えられる幅約10mを測る旧河川等が検出された。この旧河川は古墳時代後期と考えられる第2・9号住居址を切り、平安時代と考えられる第7号住居址に切られていることから、本流路が機能していた時期を古墳時代後期から平安時代までの間と想定できる。

以上、簡単にまとめを行ったが、詳細な検討は今後の報告書作成に際し行っていきたい。

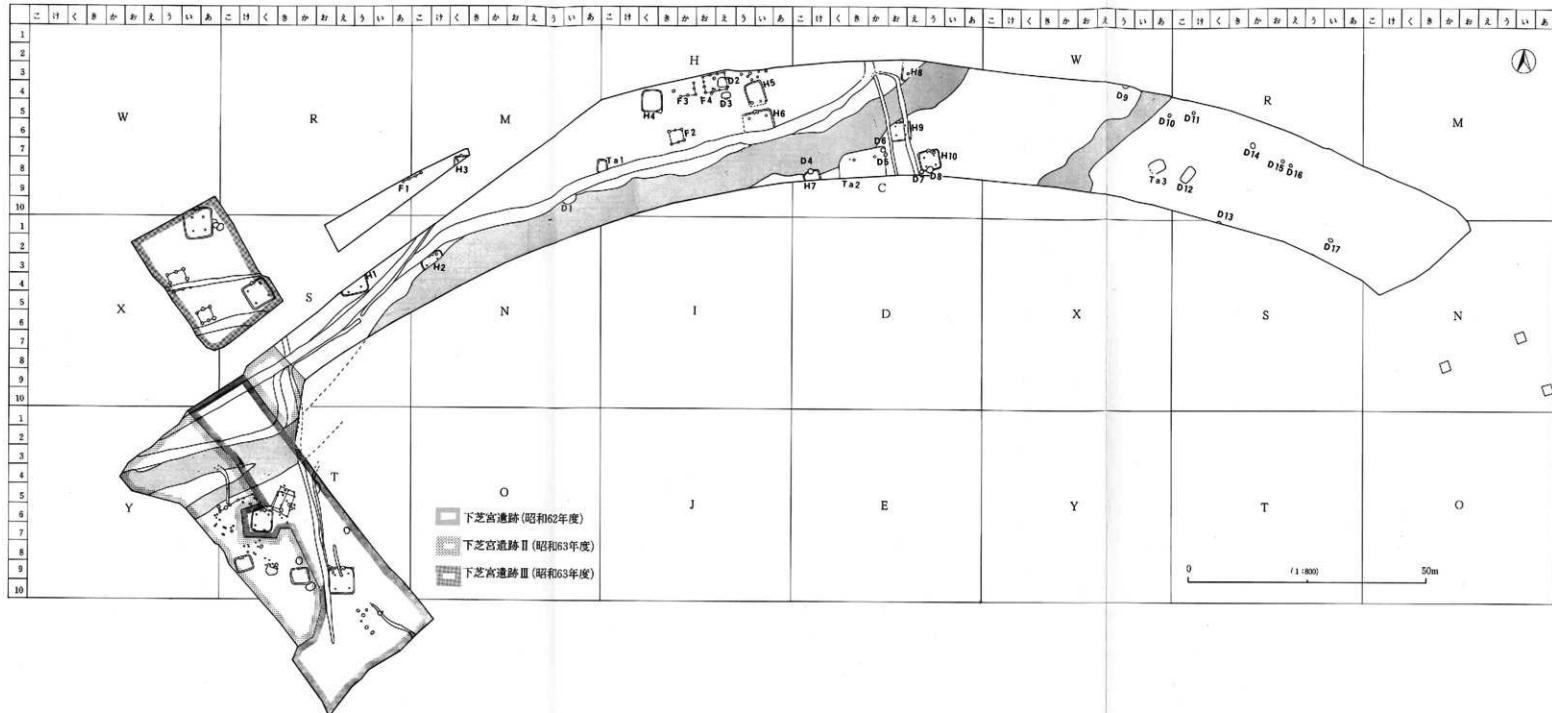
(三石宗一)



第7図 第10号住居址実測図



第8図 古墳時代土器実測図



第9図 南上中原・南下中原遺跡全体図

第V章 上聖端遺跡の調査の成果

現在の整理状況は、遺構図面の整理が概ね終了した段階にあり、遺物に関しては大半が未整理である。したがって、本概報は遺構を中心とした若干のまとめであることを、まず了承して頂きたい。

上聖端遺跡は「田切り」によって区画された浅間山から南西にのびる細長い台地上に立地する古代集落である。検出された遺構は、現時点での判断で、竪穴住居址47軒・掘立柱建物址22棟・特殊遺構1基・土坑2基・溝状遺構12基である。ここでは、竪穴住居址（以下住居址とする）の特徴を整理して、佐久平の古代集落の一端に触れたい。

検出された47軒の住居址の時代区分に関しては、古墳時代後期の住居址群15軒、奈良時代の住居址群23軒、平安時代前葉の住居址群8軒、不明1軒と現時点では捉えている。但し、土器型式、住居使用時の一括遺物等の検討が十分でないため、今後、多少の変動があることを考慮しておいて頂きたい。特に奈良時代の住居址群は、おおよそ前葉と後葉に区分されることから、古墳後期から奈良時代前葉にかけての集落経営と奈良時代後葉から平安時代前葉にかけての集落経営の大きく二段階の集落展開が予想され、それらの移行期も時代区分として問題になっている。以下、各時代の住居址群の概要を述べていきたい。

古墳時代の住居址群は、前述したように15軒であるが、完掘したものは10軒であり、ほぼ全容が解るのは12軒である。それらの形態をまとめると、以下の特徴となる。形状は、隅丸方形を基本とし方形が含まれる。規模は、床面積20m²前後にまとまり、33m²の大形住居（相対的に）が1軒ある。壁残高は、60cm前後と深い。4本主柱で周溝を持つものが多く、大半の住居にカマドに対する壁（南壁）に接する位置にピット（1～3個）があることも特徴である（一般に出入り口施設と考えられているもの）。一般に「貯蔵穴」と考えられているピットをカマドの右脇に持つものが2軒あるが判然とはしていない。また、主柱の他に住居の4隅のすべてあるいはいずれかにピットを持つものも目立つ。佐久平のこの時期に特徴的に存在する「張り出しピット」を持つものは1軒だけである。カマドは、すべて北壁にあり、構築方法は極めて単一的である。その工程は、地山（浅間第一軽石流）を掘り残して袖部を形成し、袖部先端に袖石を埋め込み、両袖石上に天井石を乗せ、そして粘土を貼って整形したものである。（地山は異なるが佐久市樋村遺跡で特徴的に見られたものである）。焚口部は浅い皿状に掘られており、燃焼部では支脚石が確認されているものがある。カマドの利用石材は、安山岩、玄武岩などである。

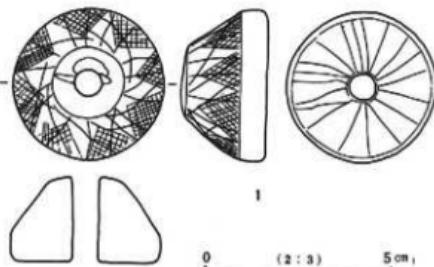
奈良時代の住居址群は、23軒確認されているが、全容が解るのは20軒である。形状は、隅丸方

形を基本とし方形が含まれる。規模は、床面積8m²前後・16m²前後・23m²前後、そして31m²の大形住居（相対的に）というようにいくつかのグループをもつ。壁残高は、60cm前後と深い。4本主柱が主体であるが、2本あるいは柱穴が確認されないものも存在する。カマドに対する壁（南壁）に接する位置にピット（1～3個）があるものも多い。4本主柱では周溝の有るものと無いものが相半するが、大形住居には壁に沿った配石が見られ、その構造が注目される。カマドは、すべて北壁にあり、石組みによって袖を造り、粘土で覆うものが典型である。また、煙道部に壺が利用されているものが3軒確認されている。大形住居のものが最も残りがよく、三つの壺が使われていた。カマドの利用石材は、浅間第一軽石流から抜き取ったと考えられる軽石であり、面取りが成されているものも多い。確認された支脚石は、すべて加工された軽石である。

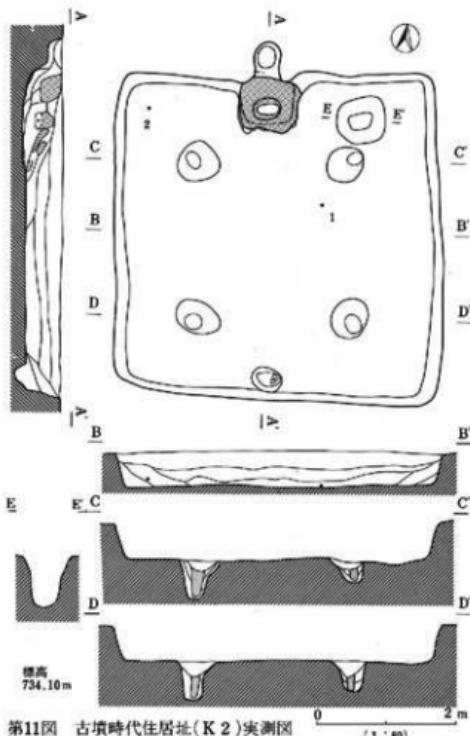
平安時代の住居址群は、8軒確認されているが、全容が解るのは4軒である。形状は、隅丸方形である。床面積10m²前後・壁残高40cm前後と床面積22m²・壁残高70cmのものがある。主柱穴は、確認されないもの、2本、4本である。また、一般に出入り口施設と考えられているピット（1～3個）が南壁側に見られるものがある。カマドは、軽石で袖と天井部の一部を組み粘土を貼って本体を造り、煙道部が壺3個で造られているものと軽石と須恵器大型の破片で袖を組み軽石で天井部を造ったものの2者が特徴的である。いずれも北壁にある。

以上に、古墳時代後期から奈良時代そして平安時代にかけての住居址を概観した訳であるが、規模・主柱穴のあり方・付属施設・カマド等にいくつかの変遷が指摘されよう。特にカマドには明確な変化が見られ、古墳時代後期と奈良時代前葉では、明らかに構築方法に変化が見られる。そして奈良時代後葉と平安時代前葉では構築方法の連続性が見られたのである。

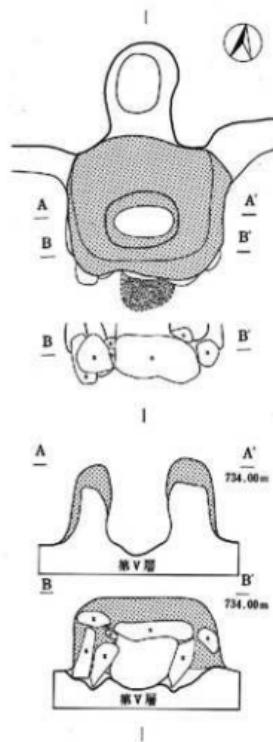
最後に、住居址群の分布に触れて、今後の問題点を整理しておきたい。時代ごとの住居址群の分布には、一線では画すことができないが、その分布範囲に片寄りを指摘することができる。古墳時代後期の住居址群は台地北側を中心に、奈良時代の住居址群は台地中央部の浅い谷を囲むように、そして平安時代の住居址群は台地南側を中心展開しているのである。また、掘立柱建物址は台地中央部の浅い谷に集中的に分布する。今後、それらの範囲内で住居址相互、そして各構造の関連を検討することによって、各時代ごとの集落の展開を把握して行こうと思っている。そのためには、土器型式の検討、住居址埋没時の廃棄遺物における個別資料的な分析等によって住居址の同時性とその動態を把握していく。 （須藤隆司）



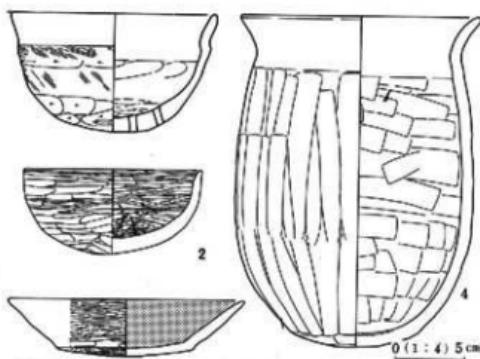
第10図 古墳時代住居址(K1)出土の滑石製紡錘車



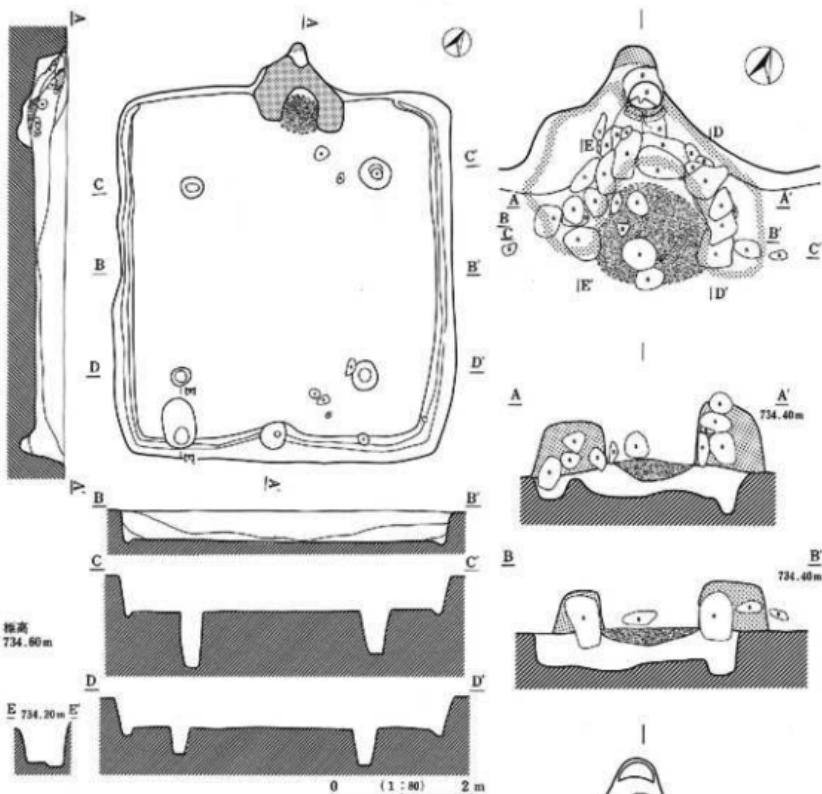
第11図 古墳時代住居址(K2)実測図



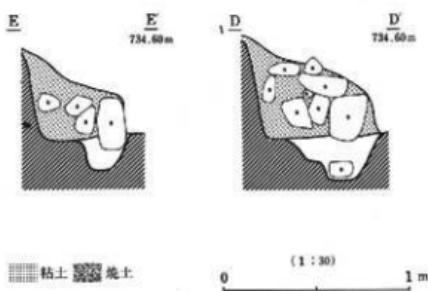
0 (1:30) 50cm |
第12図 古墳時代カマド(K2)



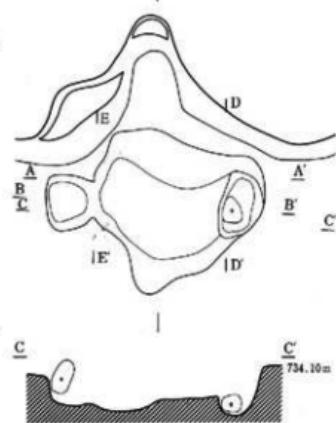
第13図 古墳時代住居址出土土器実測図(1・2K2、3・4K1)

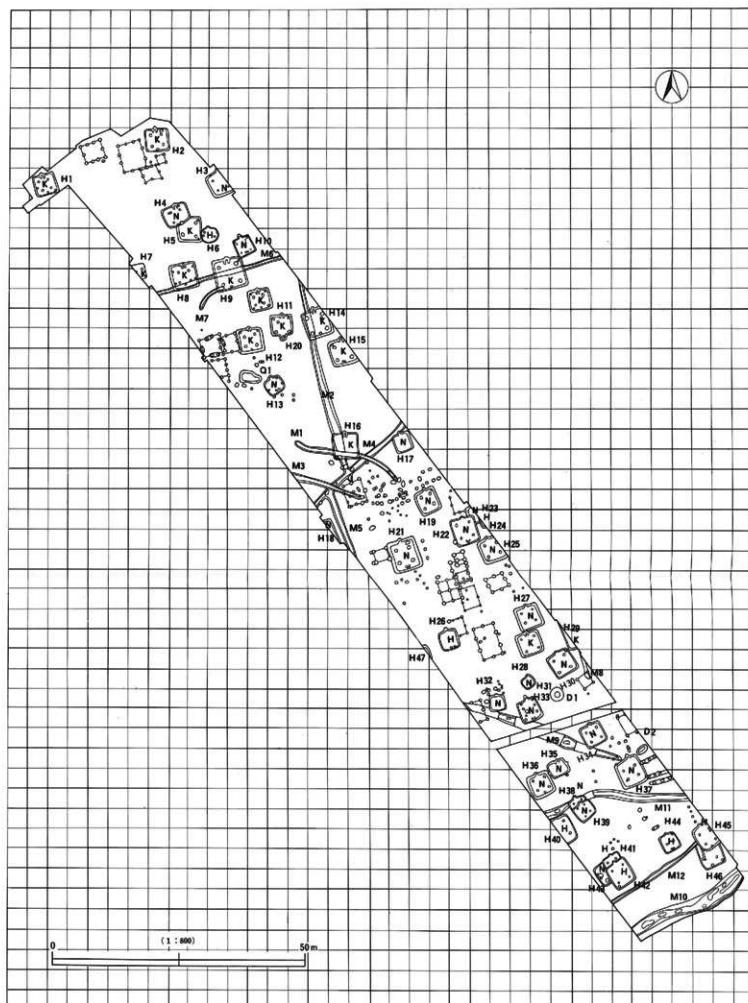


第14図 平安時代住居址実測図



第15図 平安時代カマド





第16図 上型端遺跡全体図

K・古墳時代 N・奈良時代 H・平安時代



南上中原・南下中原遺跡、上野端遺跡航空写真（中央航業社撮影）



南上中原・南下中原道路、下芝宮道路航空写真（中央航業社撮影）



上: 藤崎跡 航空写真 (中央航業社撮影)

| | | |
|--------------------|------|---|
| 佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書 | 第1集 | 『西表・竹田塚』(TNU NTM) |
| 佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書 | 第2集 | 『池原・西御堂』(YIT YMM) |
| 佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書 | 第3集 | 『芝 間』(ISM) |
| 佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書 | 第4集 | 『新 町 Ⅱ』(IIM) |
| 佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書 | 第5集 | 『市上屋敷 下川原・光明寺』(YKY YSK) |
| 佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書 | 第6集 | 『浜瀬・星歌前・西ヶ上・曲尾Ⅲ・曲尾Ⅳ』 (KAB KYM KNU KMO III KMO IV) |
| 佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書 | 第7集 | 『高野町・西大久保』(ATM SNO) |
| 佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書 | 第8集 | 『北西の久保』(IKK) |
| 佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書 | 第9集 | 『梨 の 木』(NNN) |
| 佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書 | 第10集 | 『菅田畠・新町畠・宮の上・中曾根・藤原』 (IIS IIM YMM INN TPK) |
| 佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書 | 第11集 | 『長塚古墳群』(UNM) |
| 佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書 | 第12集 | 『西仲ふた』(KNN) |
| 佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書 | 第13集 | 『前沢・葛石』(NAZ IET) |
| 佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書 | 第14集 | 『池の塚古墳群』(TNM) |
| 佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書 | 第15集 | 『巻巻・西大久保Ⅲ 曲尾Ⅱ』(SKM SNO III KMO II) |
| 佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書 | 第16集 | 『荒田・上金井 東赤坂Ⅱ』(NAK IHZ) |
| 佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書 | 第17集 | 『前沢Ⅱ・猪飼坂Ⅱ・森の木Ⅱ・宮の上Ⅱ』 (NAZ II IBZ II NNN II YMM II) |
| 佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書 | 第18集 | 『森 下』(INM) |
| 佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書 | 第19集 | 『金井城跡概報』(ONK) |

佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書第20集

長野県佐久市

芝宮遺跡群

南上中原・南下中原遺跡

長土呂遺跡群

上 聖 端 遺 跡

1989年3月

編集者 佐久埋蔵文化財調査センター

発行者 佐久市教育委員会

印刷所 信毎書籍印刷株式会社